島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第10巻　21～28頁　昭和51年12月

食物の嗜好傾向と性格に関する研究（Ⅴ）

猪　野　郁　子・藤　江　　奏*

Ikuko INO and Susumu FUJIE

Studies on the Relationship between One's Taste for Food and Personality (V)

Ⅰ　目　　的

小・中学生を対象にしたこれまでの一連の報告[(1)～(4)]において，食物の嗜好と性格特性との間にはある種の相関関係が存在することが認められた。また，近年問題となっている肥満児を中心にした食習慣や偏食の実態を調べた結果[(4)]，これらの要因も大きなウエイトを占めており，見逃がせえないことが明らかとなった。

そこで，本研究では，特にこの偏食の問題を中心にとりあげ，偏食傾向と性格特性との関連および家庭環境としては親の養育態度とどのような関連があるかを検討した。その結果，若干の知見を得たのでここに報告する。

Ⅱ　調　査　方　法

調査対象は，松江市立津田小学校５，６年の児童384名およびその保護者（主として母親を対象とした）である。

調査時期は，1975年６月である。

児童に対しては，食物の好き嫌い調査（前報[(1)～(4)]までに判明した結果から，日常的でかつ嗜好の変動の激しいと思われる食品30種を選び，第１報の方法に準じて５点法で行なわれた），田研式親子関係診断テスト一児童・生徒用およびＹＧ性格検査小学生用が実施された。

保護者には，「子どもの偏食に関する調査」が実施された。

回収された資料のうち，すべてそろっているものを有効回収数となし，その回収率は，90.1％であった。

Ⅲ　結果および考察

1．偏食傾向

児童に対する食物の好き嫌い調査の結果から，各個人の平均嗜好度と標準偏差値をそれぞれ求め，その分布状態をまとめたところ，第１図，第２図に示されるような結果をえた。両図から明らかなように，いずれもほぼ正規分布していると考えられる。

男子の嗜好度の平均は3.93，標準偏差値の平均は0.89であり，女子の嗜好度の平均は3.81，標準偏差値の平均は0.99であった。両者の間にそれほど大きな差異はみられなかった。

次に，平均嗜好度の分布図（第１図）から，低い嗜好度を示す群（Ａ群），平均値に近い嗜好度を示す群（Ｂ群）および高い嗜好度を示す群（Ｃ群）の３群に，また，標準偏差値の分布図（第２図）から，ばらつきの大きい群（ａ群），平均的な群（ｂ群）およびばらつきの小さい群（ｃ群）の３群に分け，それぞれ25名ずつ抽出して，今回の比較検討の対象とした。

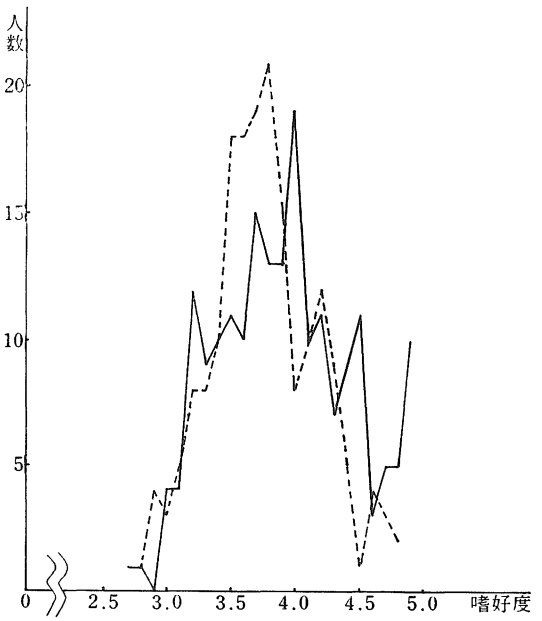
このような分類においては，低い嗜好度を示すＡ群と好き嫌いにばらつきの大きいａ群が偏食傾向にあるグループと推測されるが，偏食の定義については，さまざまな考え方があるので，一概にこれらのグループの児童を偏食児と断定することはできないと思われる。

そこで，このことについて少し検討を加えてみた。

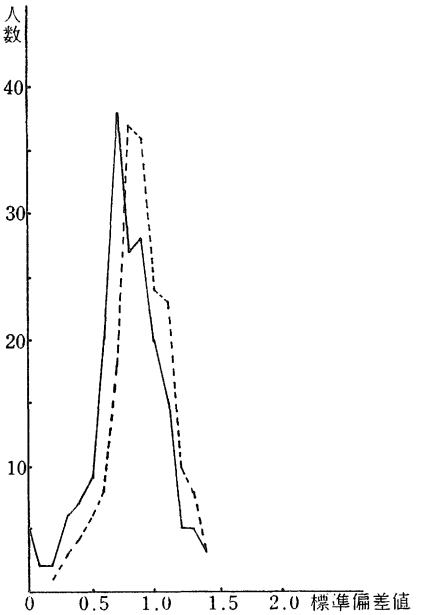
まず，男女各６群について「大きらい」とする食品をいくつ有するか，その頻度を調べた結果，第１表に示されるような結果を得た。

第１表に示されるように，男女ともＡおよびａ群には，他群に比べて「大きらい」な食品を有する者が多く，その食品の数も多いことがうかがえた。さらに，この「大きらい」とする食品の品目をみると（表は省略），ピーマン，玉ねぎ，ねぎ，にんじんなどが上位を占めており，第１報で報告した結果と非常によく一致してい

* 島根大学教育学部家政研究室



第1図　嗜好度の分布



第2図　標準偏差値の分布

第1表　各分類における「大きらい」の頻度（人数）

性別	分類	頻度／群	0	1	2	3	4	5	6	8	12
男	嗜好度による分類	A	8	10	3	1	2	1	0	0	0
		B	17	7	1	0	0	0	0	0	0
		C	24	1	0	0	0	0	0	0	0
子	標準偏差値による分類	a	2	9	8	1	2	0	1	1	1
		b	16	6	1	3	0	0	0	0	0
		c	21	3	0	1	0	0	0	0	0
女	嗜好度による分類	A	3	4	8	4	4	1	1	0	0
		B	19	6	0	0	0	0	0	0	0
		C	25	0	0	0	0	0	0	0	0
子	標準偏差値による分類	a	1	6	6	7	2	0	1	1	1
		b	12	11	2	0	0	0	0	0	0
		c	24	0	1	0	0	0	0	0	0

る。つまり，これらの食品は一般に嫌われやすい食品であり，低い嗜好度を示す者や好き嫌いにばらつきの大きい者は，極度に嫌う傾向にあると言えよう。

そこで，この一般に児童に嫌われやすいとされるピーマン，ねぎ，にんじんの3種についてどの程度の嗜好度を示しているか各群別に算出した。その結果は第2表に示されるとおりである。

第2表によると，Aおよびa群は他群に比べて著るし

く低い値を示している。

嗜好度の低い群および嗜好のばらつきの大きい群の者は，他群の者に比べ，一般に嫌われやすいとされているピーマン，ねぎ，にんじんなどを嫌う者が多く，その嗜好度も低く，敏感に反応していると見てよいであろう。

これらの結果から，AおよびＡ群を偏食傾向にある児童と考えてよいと判断し，これに準拠して，BおよびＢ群はごく平均的な嗜好を示す児童，CおよびＣ群は好き嫌いの非常に少ない児童と考えて以下の検討に供した。

2. 子どもの偏食に対する保護者の意識

母親は子どもの偏食に対してどのような意識をもっているのであろうか。子どもの偏食というものをどのように把握しているのであろうか。それらについて行なった母親への調査結果から検討を加えたいと思う。

まず，「自分の子どもは偏食と思うか思わないか」という質問に対して，男子児童に対しては52.5%，女子の場合には51.7%というふうに半数強の母親が自分の子どもを偏食傾向があると思っている。1969年，中学生を対象とした調査では，[5] 40%前後の母親が自分の子どもにある程度の偏食があるとしている。小学生と中学生という年令的なことを考えると，この数字はかなり妥当とみてよいであろう。

第２表　ねぎ，にんじん，ピーマンの群別平均嗜好値

性別	分類	群	ねぎ	にんじん	ピーマン
男子	嗜好度による分類	A	2.20	2.56	1.88
		B	3.72	3.44	2.88
		C	4.68	4.48	4.48
	標準偏差値による分類	a	2.48	3.04	2.44
		b	3.36	3.52	3.24
		c	4.28	4.20	4.44
女子	嗜好度による分類	A	2.12	2.04	2.74
		B	2.96	3.20	3.12
		C	3.63	3.60	3.72
	標準偏差値による分類	a	1.96	2.52	2.54
		b	2.24	3.16	2.68
		c	3.80	3.80	4.12

それでは，このような母親の認識と児童たちの実態との間にどのような関連がみられるであろうか。食物の好き嫌い調査の結果と照合しながら検討してみると第３表のようになる。

第３表に示されるように，母親が「偏食あり」とした者の平均嗜好度は，「偏食なし」とした者のそれに比べて男女とも低い値を示し，標準偏差値は高い値を示して若干の差がみられた。

第３表　子どもの偏食有無に対する母親の意識（Ｉ）

性別	偏食有無（%）		平均嗜好度	標準偏差値
男子	有	52.5	3.81	0.99
	無	43.5	4.06	0.77
	N.A.	4.0	—	—
女子	有	51.7	3.62	0.98
	無	44.9	3.91	0.88
	N.A.	3.4	—	—

さらに，各群別に子どもの偏食有無に対する母親の意識状況をみたのが第４表である。

第４表に示されるように，男女とも，児童の偏食傾向に対しては母親の認識とかなり合致していることが推測され，χ^2 検定においてそれぞれ有意の差がみとめられた。すなわち，母親はおおよそ子どもの偏食傾向については把握しているように思われる。しかし，嗜好調査では好き嫌いがないと判断された群（C，c）の母親の中にも「偏食あり」と答えた者がいたり，また逆に，偏食傾向の群（A，a）の母親の中に「偏食なし」と答えた者がいることなどを考えると，偏食というもののとらえ方にはいろいろむつかしい点があることが推察される。

それでは，偏食の矯正についてどのように考えているかをみたところ，「偏食あり」と答えた母親のうち男女いずれの群とも，80%以上の者が偏食は矯正すべきであ

第４表　子どもの偏食有無に対する母親の意識（II）

性別	分類	群	偏食あり	偏食なし	無答	
男子	嗜好度による分類	A	15	8	2	$\chi^2=8.44$ $df=2$ $p<0.02$
		B	14	11	0	
		C	6	18	1	
	標準偏差値による分類	a	17	7	1	$\chi^2=8.45$ $df=2$ $p<0.02$
		b	11	13	1	
		c	7	17	1	

女	嗜好度による分類	A	16	8	1	$\chi^2=9.48$ $df=2$ $p<0.01$
		B	9	15	1	
		C	6	19	0	
子	標準偏差値による分類	a	17	8	0	$\chi^2=15.352$ $df=2$ $p<0.001$
		b	13	9	3	
		c	4	21	0	

ると考えており，なんらかの方法で矯正を試みている。その主な理由としては，栄養の偏りを心配することが一番多くあげられ，ついで家庭の外で食事をする時困るからなどであった。

反対に，矯正する必要がないと答えた母親もいたが，その理由として，年をとれば自然に解消する性質のものであるからというのが最も多くみられた。

中学生への調査[5]においても，質問方法がことなるが，食することができるように調理者が調理工夫する態度と，本人が意識し努力し食することができるようになるのを待つ態度とがみられた。

要するに，偏食の矯正についての考え方には，その子どもがどういう食品を嫌って食べないのか，その食品が一品なのか，それとも緑黄野菜類とか肉類とか我々の身体構成や健康維持に欠くことのできない食品群を嫌って食べないのとでは，必然的に考え方，とらえ方もことなってくるであろうし，食べさせ方もことなってくると言えよう。

では，子どもに偏食がある場合，どんな食品を嫌うのが母親にとって問題となっているのであろうか。子どもが食べたくないなら，なにも無理に食べさせなくともよいと思う食品にチェックさせてその頻度をみたところ，香辛料，たけのこ，かぼちゃ，かまぼこ，ちくわ，ソーセージ等が上位を占めた。

これと反対にどうしても食べて欲しいと願っているものとしては，ほうれん草，海草類，にんじん，果物，魚，肉，卵，ピーマン，乳製品など上位にあげられていた。

これらの結果は，偏食の害として栄養的偏りを第一の理由にあげていることなどから判断して，栄養価の高いものはなんとしてでも食べさせたいとの願望のあらわれであり，反面，かまぼこやソーセージなど，別に食べなくともよいと考えたのは，調査時期前後に AF_2 が大きな社会問題となったことに敏感に反応したからだと思われる。また，香辛料については，全く無理強いしていないということは当然の結果であろう。

3. 性格との関連

偏食の原因については，いろいろな要因が考えられ，それらが複雑に関係しているが[6]，その一つとして，性格的要因が考えられており，今までの一連の研究においても食物の嗜好と性格との間にはなんらかの関連がみられる[(1)〜(4)]。したがって，本研究においても，偏食と性格との関係について検討を加えた。

まず，食物の嗜好調査において群分けされた6つの群について，男女それぞれ12の性格特性の平均値を求めたものが第5表である。

第5表からわかるように，平均嗜好度について考えると，t検定の結果，男子では，偏食傾向にあるA群は普通群Bとの間に，性格特性 Co に有意の差がみられ，高い嗜好度を示すC群との間では，C，Co，G，A および S に有意差がみられた。

一方女子の場合は，男子に比べるとそれほど多くはなかったが，それでもA群とC群との間に，OおよびGの性格特性に有意差がみとめられた。

さらに，標準偏差値については，男子の場合，a群とb群との間に性格特性 N，Co，Ag および G に，c群との間に C，Co および Ag に有意差がみられた。一方女子については，a群とbおよびc群間には，男子ほどはっきりとしたちがいはなく有意差がみられる性格特性はみとめられなかった。

以上の結果から判断すると，偏食傾向と各性格特性との間には，性別によってかなり異なる傾向が推測された。すなわち，Aおよびa群一つまり偏食傾向にあるとみなされる者は，他の者に比べて気分の変化が大きく，非協調的であり，また，どちらかというと，支配性社会性外向性に劣っているように思われる。

これに比し，女子の場合は男子のようにはっきりした傾向はみられなかったが，強いてあげれば，偏食傾向にある者は他に比べて，やや主観的で非活動的であるかと思われる。

つぎに，性格のタイプと偏食との間になんらかの関係があるのか，そして，関係があるとすればどのようなタイプのものであるかということについて検討を行なった。

YG性格検査の結果から，性格タイプを判定して5類型に分類し，各類型ごとに男女それぞれ平均嗜好度と標準偏差値を求めたものが第6表である。

第6表に示されているように，男子ではE型の者が他のタイプの者より嗜好度が最も低く，反対に標準偏差値は最も高くなっており，いわゆる偏食傾向の大きいグループのようにみられる。そして，B型およびD型との間ではt検定の結果，明らかに有意差がみとめられた。

第5表　性格特性の粗点平均値

			D	C	I	N	O	Co	Ag	R	G	T	A	S
男	嗜好度	A	3.12 ±2.38	3.56 ±2.00	2.40 ±1.65	3.04 ±1.98	3.20 ±1.63	3.80 ±2.23	5.12 ±1.61	5.08 ±1.91	2.44 ±1.66	3.24 ±2.07	3.52 ±1.91	4.80 ±1.55
		B	2.52 ±2.20	2.24 ±1.80	1.92 ±1.63	2.32 ±2.11	2.84 ±2.28	2.48 ±1.73	4.52 ±1.75	4.76 ±1.85	3.56 ±1.70	3.12 ±2.38	5.20 ±1.63	6.28 ±1.24
		C	2.92 ±2.28	3.28 ±1.81	2.28 ±1.88	3.08 ±1.89	3.08 ±1.68	2.52 ±2.04	5.16 ±1.51	4.84 ±1.88	3.04 ±1.69	3.16 ±2.13	4.68 ±2.19	5.56 ±2.06
子	標準偏差値	a	2.92 ±2.17	3.72 ±1.94	2.80 ±2.17	3.72 ±2.03	3.20 ±1.68	3.96 ±1.88	5.72 ±1.17	5.32 ±1.49	3.52 ±1.66	3.48 ±1.82	4.08 ±2.01	5.52 ±1.73
		b	2.88 ±2.47	2.29 ±1.96	1.96 ±1.81	2.32 ±1.77	3.04 ±1.69	2.44 ±2.06	4.68 ±1.77	4.84 ±1.90	2.36 ±1.56	3.04 ±2.20	3.80 ±1.82	5.32 ±1.79
		c	2.64 ±2.19	2.24 ±1.87	1.84 ±1.72	2.66 ±2.23	3.12 ±2.16	2.48 ±1.71	4.76 ±1.87	4.68 ±1.93	3.32 ±1.60	3.04 ±2.31	5.00 ±1.65	6.04 ±1.64
$p<0.05$の群間				A－C B－C a－c		a－b		A－C A－B a－c a－b	a－c a－b		A－C a－b b－c		A－C b－c	A－C
女	嗜好度	A	2.92 ±2.03	2.60 ±1.60	2.56 ±1.87	3.00 ±1.82	3.28 ±1.94	2.76 ±2.00	4.52 ±1.71	4.12 ±2.20	2.69 ±1.78	2.84 ±1.81	4.16 ±1.72	5.44 ±1.50
		B	3.08 ±2.64	3.16 ±1.70	3.56 ±2.18	3.12 ±1.90	2.52 ±1.50	2.32 ±2.17	3.80 ±1.44	3.96 ±1.96	2.64 ±1.89	3.36 ±1.80	3.68 ±1.84	5.28 ±1.62
		C	2.60 ±1.95	2.88 ±1.96	2.24 ±2.02	2.76 ±1.50	2.36 ±1.77	2.56 ±2.02	4.44 ±1.82	4.44 ±1.78	3.52 ±2.04	2.40 ±1.65	5.00 ±2.02	6.08 ±1.70
子	標準偏差値	a	2.44 ±2.59	2.84 ±1.74	2.56 ±2.02	2.64 ±2.03	2.56 ±1.78	2.72 ±2.42	4.32 ±1.54	4.52 ±1.87	2.92 ±1.84	2.76 ±1.85	4.40 ±1.60	5.92 ±1.63
		b	2.88 ±2.08	2.92 ±1.75	2.44 ±1.73	3.08 ±1.73	2.92 ±2.11	2.60 ±2.00	4.44 ±1.38	5.12 ±1.71	2.32 ±1.72	2.84 ±1.99	4.08 ±1.86	5.76 ±1.45
		c	2.32 ±2.05	2.52 ±1.91	1.76 ±1.73	2.40 ±1.68	2.64 ±1.64	2.12 ±1.50	4.24 ±1.73	3.76 ±1.69	3.40 ±2.21	2.36 ±1.80	5.24 ±2.24	5.88 ±2.68
$p<0.05$の群間			b－c		B－C		A－C			b－c	A－C		B－C	

第6表　性格類型別食物嗜好度および標準偏差値

性別	類型／分類	A	B	C	D	E	t検定結果
男子	嗜好度	3.90±0.41	4.05±0.57	4.02±0.57	4.07±0.58	3.72±0.45	B－E $p<0.05$ D－E $p<0.05$
	標準偏差値	0.96±0.37	0.90±0.37	0.80±0.21	0.81±0.35	1.00±0.28	C－E $p<0.02$ D－E $p<0.05$
女子	嗜好度	3.73±0.39	3.72±0.48	3.79±0.45	3.83±0.36	3.78±0.52	
	標準偏差値	0.95±0.18	1.02±0.24	0.91±0.28	0.92±0.20	0.96±0.20	

これに対して，女子の場合は，男子のように明らかな差はみとめられなかった。

E型というのは，不安定消極型であり，情緒的不安定，社会的不適応，非活動的，消極的，内向的性格で，性格の悪い面が内向するタイプである。このようにE型の者に偏食傾向があるということは，先に，性格特性について検討した結果，これらと関連の深い因子において有意差のみられたこととよく合致している。そして，この場合においても，女子は男子のようにはっきりしたちがいが認められなかったことも同じであった。

4.　偏食と親の養育態度との関連

偏食に関係する因子としては，親の子どもに接する日常の態度も非常に大きなウエイトを占めるものと考えられている。ここでは，親の養育態度を親子関係診断テスト（児童・生徒用）を用いて診断し，児童の偏食傾向との関連について検討をおこなった。

児童からみた父親，母親の養育態度について，嗜好度および標準偏差による分類ごとに男女別にまとめてダイアグラフに表わした。

第3図は，嗜好度分類による父親の養育態度をみたものである。

それによると，各群ともすべての型でだいたい50%あるいはそれ以上の値を示している。しかし，各群の比較をすると，男子で，厳格型，期待型および干渉型においてA群が高いパーセンタイルを示す傾向にあり，特に干渉型では，t検定の結果，A群とB，C群との間に5%の危険率で有意差がみとめられた。女子の場合は，拒否傾向において，A群がやや低い傾向がみられ，その中でも積極的拒否型にA群とC群との間で5%の危険率で有意差がみられた。

標準偏差値の分類によるダイアグラフは省略するが，男子の場合，偏食群（a群）は拒否型で低いパーセンタイルを，女子では，干渉型で低いパーセンタイルをそれぞれ示していたが，他群との間で有意差のみとめられたのは，女子の場合のa，c群間の干渉型のみであった。

これらの結果から考えると，偏食傾向にある児童の父親の場合は，どちらかというと，支配的態度は少なくあまり干渉はしない方であったが，拒否的な態度にやや問題があるようにみられた。男女の性差によって若干父親の態度にことなる傾向がみられたが，それは家庭内での男女のしつけのちがいによるのであろうと思われるが，それについては機会をみつけて詳しく検討したいと思う。

つぎに，母親について考えると，ダイアグラフは第4図に示されるが，ここに明らかなように，男子の場合，偏食傾向にある群は父親の場合と同じく，厳格型や干渉型的要素が少ないような傾向がうかがわれた。しかし，はっきりと有意差のみられたのは，A群とC群の間における干渉型と矛盾型においてであった。女子の場合は，父親の場合のように拒否型傾向がはっきりとは表われず，全体に有意差のみられたものはなかった。

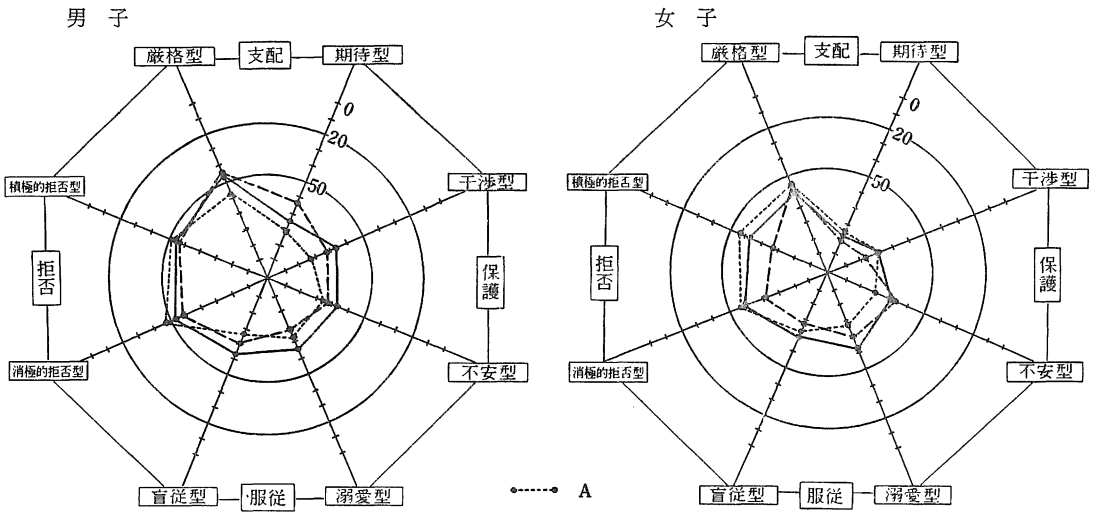
標準偏差値による分類でのダイアグラフは省略するが，男女とも拒否的態度，特に積極的拒否型において，偏食群に問題がある結果がえられた。

以上の結果から，特徴的に考えられることは，偏食傾向にある児童の両親は，支配的態度，拒否的態度で他の群と様相を異にしているようであるが，特に男子の場合は，父親も母親もあまり干渉しないと受けとめる傾向があり，女子の場合は，消極的，積極的拒否型を中心に問題があるように思われた。

前にも述べたように，偏食傾向にある子どもの母親は，わが子を偏食だと思っている場合が多く，そういう母親の大半は，なんらかの方法で偏食の矯正をしているのであるが，それは子どもにとってあまり厳しいものではなく，かなりゆるやかなものであるように思われる。

5.　嗜好度と標準偏差値の相関

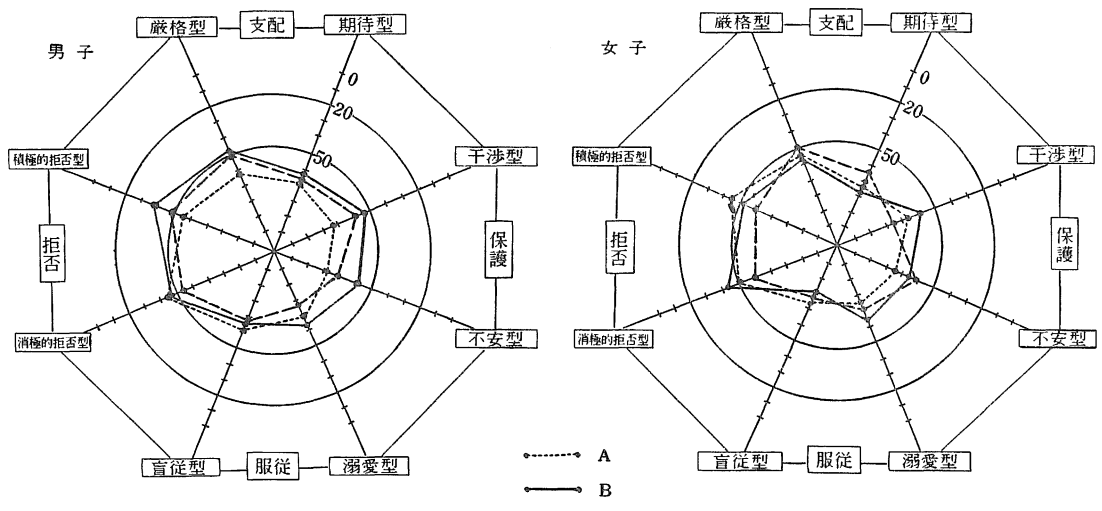
本研究では，嗜好度と標準偏差値の両面から偏食に関するグループ分けをおこなって検討をおこなってきた。この嗜好度によるグループ分けと標準偏差値によるグル



型	A	B	C
矛盾型	61.24	48.32	51.12
不一致型	55.33	49.92	55.92

型	A	B	C
矛盾型	62.36	64.36	58.00
不一致型	51.12	54.64	61.88

第3図　嗜好度分類による父親の養育態度



型	A	B	C
矛盾型	59.44	37.56	49.60
不一致型	45.36	50.32	52.92

型	A	B	C
矛盾型	58.29	58.60	53.52
不一致型	48.08	53.44	58.48

第4図　嗜好度分類による母親の養育態度

ープ分けにはどの位の一致点がみいだされるかを，男女別，クラス別に相関係数をもとめて検証をおこなった。

その結果，非常に高い相関（0.70～1.00）を示したクラスは，男子4，女子2，著しい相関（0.40～0.70）を示したのが男子5，女子4というふうに，10クラス中，男子で9，女子で6クラスが高い相関を示した。

このことから，嗜好度によるグループ分けと，標準偏差によるグループ分けに関しては，かなり高い一致性があると考えてさしつかえないと思われる。

したがって，偏食傾向をみる場合，いずれの指標でも

だいたいの傾向はつかめると思われる。しかし，性格検査や親の養育態度などとの検討をおこなった結果では，おおむね一致する傾向はえられたが，若干不一致な点もみられたので，偏食傾向をより正確に把握していくためには，両者による検討をしていく方が望ましいと思われる。

Ⅳ　要　　約

偏食に関する研究の一環として，子どもの偏食に対する意識，偏食と性格との関連性，ならびに親子関係との関連を調べるために本研究は実施された。その結果，次のようなことがらが明らかにされた。

1．偏食傾向にある児童は，日常よく使用される食品の中で，極度に嫌う食品を1～数種有している。また，一般的に嫌われやすいとされている食品についても，特に低い嗜好度を示した。

2．母親は，子どもの偏食についてだいたい把握しており，子どもが偏食であると答えた母親のほとんどが何らかの方法で矯正をおこなっていた。

3．その理由としては，栄養がかたよるからという心配が最も多く，栄養的価値が高く，調理法が多様で使用頻度の高い食品が嫌われる場合を特に重視して問題にしているようであった。

4．性格との関連では，男子では偏食傾向にある者がそうでない者より，気分の変化大，非協調的，服従的，社会的内向，神経質傾向がみられた。女子では，偏食傾向にある者が，より主観的，非活動的傾向にあった。

5．性格タイプでは，男子では消極的不安定型Eのものに偏食傾向がみられた。しかし，女子ではタイプ別の差はみられなかった。

6．親子関係との関連では，偏食傾向にある男子は，両親を干渉しないとみており，他群との間に差がみられた。女子では，両親に拒否傾向をみとめていた。

7．偏食傾向を調べるにあたって考えた嗜好度による分類と標準偏差値による分類との間には，著しい相関がみとめられ，両者の分類の妥当性を示した。しかし，両者について検討することが，より望ましいと考えられた。

本研究を終えるにあたり，この調査のため貴重な時間をさいてご便宜を計っていただいた松江市立津田小学校の先生がた，ならびに資料の集計分析に協力いただいた益田農林高校田中節子講師に深甚の謝意を表します。

この報告は，昭和51年度日本家政学会中四国支部総会にて発表した。

参　考　文　献

(1)　中山郁子，藤江奏；島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編），**4**，51（1970）
(2)　中山郁子，藤江奏；同上，**5**，15（1971）
(3)　猪野郁子，藤江奏；同上，**6**，1（1972）
(4)　藤江奏，猪野郁子；同上，**7**，97（1973）
(5)　表江正子，家庭環境と食物嗜好，1970年度卒業研究
(6)　平井信義「偏食をなおす」全国学校給食協会，（1974）